

# インフラDX大賞で大臣賞

## 金杉建設

「現場での取り組みのほか、ICT施工などの普及推進の活動も評価された。自社だけではなく、業界全体に普及を進めるお手伝いをしたい」という気持ちが一層強くなった。



吉川社長(左)と小俣室長

2022年度インフラDX大賞の国土交通大臣賞を受賞した金杉建設(埼玉県春日部市)の吉川祐介社長はこう語る。受賞工事で小規模土工事におけるICT施工の有効性を確認したことを踏まえ、「3次元設計データ作成の内製化は重要だ」と強調する。

## 小規模ICTの有効性確認

Construction大賞優秀賞を受賞するなど、地域建設業におけるi-Constructionプランナーの一角として走り続けてきた。受賞工事は、埼玉県発注の「総A除)5021社資交付金(街路)整備工事(柳之宮橋迂回路整備工事その1)」。綾瀬川に架かる柳之宮橋(八潮市)の架け替えに向け迂回

金杉建設は、17年度に第1回i-Construction大賞を受賞した同社は、自社保有している後付

けマシンガイダンス(MG)システムを標準機に取り付けてICT土工を実施した。また、各種埋設物の占有管理者から埋設図を入手して、施工範囲外の埋設物であっても全て3次元モデル化した。同社の小俣陽平工事管理本部長・i-Construction推進室室長は、3次元モデル化で埋設物

## 3次元設計データ内製化を

をワンマップ表示したことで「従来なら工事を進めてから分かる支障箇所も事前に発見できた。全体的な打ち合わせや、地域住民への説明にも有効だった」と話す。吉川社長も「問題点を可視化し、トラブルを事前に防ぎ、現場がスムーズに進んだ」と手応えを口にする。

排水構造物掘え付けに伴う土工量が300立方メートル程度の小規模工事

で、0.25立方メートル級バックホウで床掘りを実施した。排水構造物の掘え付けで丁張りレス化を実現し、市街地での通行止め日数を大幅に削減した。小俣室長は「直線部分に比べて3、4倍の丁張りが必要になる曲線部分で特に効果を発揮した。協力企業にとっても手元作業員を減らせることは大きい」と説明する。

吉川社長は「効率を求め過ぎるのではなく、失敗例から学び、知識を蓄積することで、従来工法とICTの使い分けができる」と強調する。小規模現場への普及に向けては「0.25立方メートル級といった小型のバックホウにもMGが標準装備され、ICT建機のリース料も通常の建機並みにならないと、中小建設業への広がりは難しい。その前提として、3次元設計データ作成の内製化が必須だ」と訴える。

吉川社長は「一緒にICTの普及促進に取り組んできた埼玉県と同時受賞できてうれしい。中小建設業への普及に向け、3次元設計データ作成の内製化に関する重要性を理解してもらい、人員配置や投資をする必要がある」と話す。

